

河川・緑地

生態系に配慮した施設整備により、人と自然が共生する環境を再生

【遠賀川魚道公園整備事業】

事業概要 2013年グッドデザイン賞受賞

福岡県遠賀郡芦屋町祇園町
公園面積約20,500㎡、河口干潟を含む多自然魚道延長約300m

プロデューサー：国土交通省遠賀川河川事務所河川環境課、伊東啓太郎（九州工業大学准教授）、辰本卓（遠賀川河川事務所技術副所長）、小野勇一（九州大学名誉教授）
ディレクター：伊東啓太郎（九州工業大学准教授）、深浦貴之（遠賀川河川事務所河口堰管理支所）、滝口正行（松浦・白石JV）、白石慎二（松浦・白石JV）、松本伸彦（松正・福山JV）、吉田靖博（株式会社三島建設）
デザイナー：伊東啓太郎（九州工業大学准教授）、九州工業大学環境デザイン研究室、八千代エンジニアリング株式会社、株式会社建設技術研究所

※所属は、2013年10月現在



魚が遡上しやすい魚道

整備の背景

九州北部を流れる一級河川の遠賀川には、取水のための大規模な河口堰が設けられている。本施設には魚道が併設されているが、この魚道では特定の条件を満たす魚しか遡上できず、この周辺の河川敷はコンクリートで覆われているという課題があった。

このため、大学と国、地域、企業の協働で、多様な魚種に対応した魚道、干潟を併設すると同時に、公園としてのランドスケープ設計を行った。施工後も都市の生物多様性を高め、地域とともに育つ空間としての活用・展開を行っている。

コンセプト

生き物と人をつなぐゆるやかな水辺空間の再生

【整備前後】



整備前

整備後

【整備のポイント】



公園内のデザイン全体を通してアフォーダンス（注）の考えを応用し、利用者にとって使いやすく、多様な機能を持つ空間を創出した。

（注）アフォーダンス：与える、提供する
（例「緩やかな斜面では、寝転がりたくなる」というような環境が人に与える影響のことを指す）



緩やかな曲線を用いて公園を設計し、魚道は遠賀川の西部を流れる西川の線形に合わせることで、自然に近い形を再生した。



河川敷を覆っていたコンクリートを砕き、魚道の護岸の内側に基礎材として再利用している。



他事業で発生した自然石を魚道の右岸に再利用し、生物が生息しやすい環境を創出した。



潮汐による水位の変化が見て取れるように、下流の干潟に高さの異なる3種類の杭を設置し、子どもたちの環境学習の場とした。



注意喚起やマナーを守った公園利用を促すサインは、目にした人に圧迫感を与えないようやさしい色合いや言葉づかいとしている。



入江干潟：底生生物の生息空間、魚道を遡上・降下する魚類の休憩空間となるよう設計。



草地：他工事で廃棄される予定だった樹木を、緑地の一部に移植した。（地域住民と一緒に植樹）

委員コメント 伊東啓太郎（九州工業大学准教授）

・河川は本来、憩いの場や遊びの場など人々の生活にとって重要な空間であると同時に、生物にとっても重要な生息空間であるため、景観面に配慮しながら、水辺や草地、干潟などの豊かな河川環境をつくっていく必要がある。

（今後、長崎県において類似施設の整備を行う際に注意すべき点）

・長崎においても自然豊かな地域が多いので、地域本来の環境保全対策、自然再生を目指した方が良い。

事業主体コメント 国土交通省遠賀川河川事務所河口堰管理支所

・安全対策の一つとして設置を予定していた進入防護柵について、河川利用者と河川管理者とで意見が分かれており、調整に苦慮した。

⇒ 様々な問題解決のため、学識者や住民代表等からなる「懇談会」や「住民参加型ワークショップ」を何度も開催し、合意形成を図った。

・景観への配慮や自然とのふれあいのためには、進入防護柵は設置しない方が望ましい（利用者の視点）が、地元と協議を重ね、水難事故防止（管理者の視点）のために設置することとした。その際、可能な限り柵高を抑え、ダークブラウンで施工するなど景観へ配慮した。

（整備を終えて）

- ・「川と海をつなぎ、魚たちがのぼりやすく、生き物と人も集う魚道」という目標を達成できた。
- ・「新しい魚道が出来てから周りの景色も気持ちいい。コンクリートの時はここまで来ていなかった」との声が聞かれ、ウォーキングやバードウォッチングを楽しむ人が増えた。
- ・近隣小学校では魚道での生物調査が授業のカリキュラムに盛り込まれるなど、環境学習の場として利用されている。
- ・現状も継続して魚の遡上のモニタリング、草地など生態系のマネジメントを行っている。